

111

長崎でド・ロ神父が設立した「出津保育所」 ー日本で最初の保育所ではなかろうかー

小林 恵子（国立音楽大学名誉教授）

二回にわたり「カトリックの果たした先駆的な児童福祉施設」について発表した。今回は昨年発表した長崎のド・ロ神父の設立した「出津保育所」が日本では最初の保育所でないかという疑問から再びこの保育所をとりあげ考察する。

I カトリックによる先駆的な児童福祉施設

カトリックが貧しい庶民層を対象に福祉施設を設立し、子供、老人、病人などの救済に先駆的な足跡を残したのはイエズス会のザビエルが布教を開始した頃からあげられる。1555年、イエズス会の医師アルメイダは当時行われていた間引きの習慣をみて大分に「育児院」を設立し、乳母を雇い乳牛を飼育し日本で始めて人口栄養を導入し赤ん坊を養育した。その背景には結婚、育児、家庭を尊重するカトリックの信仰と思想があり、児童福祉の原点がみられる。

二世紀に及ぶキリスト教迫害のなかで継承されたキリシタンは長崎の大浦天主堂の設立でプチジャン神父によって発見され、近代日本のカトリック教会が発足するのは1865年である。開国後の日本への布教活動は、ローマ教皇によってパリに本部をもつパリ外国宣教会にゆだねられたのでカトリックの宣教師はもっぱらフランス人であった。

1872年には、サン・モール修道会の修道女、メール・マチルド他4名によって横浜で孤児、捨て子、困窮者の乳幼児のための施設「仁慈堂」が開設され、また同年、長崎で大浦天主堂の神父たちによって「聖嬰会」という名の孤児たちの養護施設が設立されている。

II ド・ロ神父の指導による「浦上養育院」1874年

キリシタン迫害は幕末から明治にかけて厳しさを増し、信仰を守った浦上村の人々は一村総流罪として各地に流された。こうした信仰の自由の弾圧と迫害が世界の世論を動かし、政府はついに1873（明治6）年、切支丹禁制の高札を撤去するに至った。こうして流罪の旅から浦上へ帰った村人たちは、大声でオラショ（祈禱）のできる喜びを勝ち得たが、そこには住む家もなく荒れ果てた村での生活苦が待っていた。さらに翌年には大暴風雨に見舞われ続いて赤痢、天然痘が流行し多くの死者をだした。

このとき救助の手を差しのべ疫病の看護と治療に当たったのがド・ロ神父である。そして、神父の助け手となり救護活動に当たったのが岩永マキたち四人の娘であった。娘たちは疫病が他の人々に感染しないよう信仰を同じくする高木仙右衛門の納屋に合宿し病人の救護に当たったが、このとき天然痘で親を亡くした幼い女の子を抱え養育するという使命にたたされる事になった。こうして孤児養育という愛の業がマキたち四人の娘たちの手によってこの納屋で開始され、「浦上養育院」が設立された。

マキたちのこの共同体は「女部屋」と言ったが、神父はこの生活に起床、祈り、活動、就床という規則を与え、やがて明治10年、修道会として組織され「浦上十字会」と命名された。やがて、この修道会は生きた模範となり、長崎各地に同じような修道会ができ、これを母体として社会福祉施設を推進させていった。そして、その最初の指導者として産みの親となったのがド・ロ神父である。



III ド・ロ神父（MARC. MARIE. DE ROTZ 1840 - 1914）

（1）ド・ロ神父について（略伝は当口配付）

彼はフランスのノルマンディの貴族の生まれ、1868（明治元）年、27歳で長崎に来て印刷、建築、農業、医学など日本の近代化に貢献した。彼はフランスで聖ジュリアン教会の社会福祉担当の神父でこの道に詳しく、日本では特に福祉事業の発展に多大な足跡を残した。その生涯は片岡弥吉著「ある明治の福祉像」（日本放送出版協会）に詳しい。

（2）外海地区、出津教会の司祭として（1879年）

ド・ロ神父が赴任した外海は西彼杵半島の東シナ海に通じる断層海岸で良港や水田もなく狭い段々畑で生きる人々は貧しい生活を余儀なくされてきた。しかし、この土地は大村純忠が領主であった16世紀からキリシタンの里として神父が小さな港に来たとき人々は行列をつくって迎え、子供たちは教理を歌いながら先頭を進んだという。それから2世紀に及ぶ過酷なキリシタン迫害の後、ド・ロ神父がみたこの村の人々の生活はあまりに貧しく過酷であった。

（3）「出津救助院」の開設（1883年）と諸事業

神父は村人の魂と肉の救済のため村おこしをはかり、人々が生活の道を自分で切り開くため、1883（明治16）年「出津救助院」（授産所）を創設した。彼は「浦上十字会」をモデルに「聖ヨゼフ会」をつくり、これを母体として機織り、メリヤス編み、パン、マカロニ、トマトやイチゴの栽培等の技術を娘たちに教えた。また、薬局をつくり、農業の改良、洋式作業服の考案、水車による製粉工場、「ドロさまそーめん」、建築に「ド・ロ壁」を使う等の創意工夫にみちた諸事業を行った。

IV ド・ロ神父と出津保育所

(1) 学校教育と教育法

ド・ロ神父は自分の体験から幼少期の教育を特に重視し、先ず着手したのが学校の設立である。パリ外国宣教会年次報告(1880年度)に「海外地区には100人の男子生徒の通っている学校が二つあって、女学校も四つあり」とある。

また、出津でも孤児の養育を開始したが後には手がたらず、岩永マキの「浦上養育院」にゆだねている。

彼の教育法はカトリックの信仰と教義を基盤とし、子供が手足を使って自ら働き学んでいく習慣を身につける事であった。彼は文字の読めない村人の多いのをみて幼少から文字に親しみ、誰にも読める本をつくって心を照らしてやることを願っていた。その著「知恵明々之道」(明治10年)で「大切な事は文字を読むだけでなく知識のローソクに火をつけて精神を照らす事」にあり、知識をつめこみ頭でっかちにするのでなく生活のなかで生きた知識を身につけ役立て消化させる事であった。このため、教理は平易で身近なものをとりあげ、調子をつけ歌えるよう工夫された。歌や祈りは幼児期から日々の生活にとけこんで教えられ、仲間と楽しく導くやり方が彼の教育法であった。

神父の茶目つけと快活、ユーモアに富んだ人柄、楽しいお話や遊びは子供を喜ばせ、苦しいときも新しい道を考え切り開いていく彼の創意工夫が大きな感化を与えた。

(2) 出津保育所の開設と子供の数

出津保育所の開設年月については正確な事は判らないがド・ロ神父記念館の出版物には「1885(明治18)年、保育所開設」と明記している。手すき網によるイワシ網すき工場が網が工場生産されるようになって採算がとれず閉鎖されたあと、その建物が保育所として使用されたもので、クーザン司教報告に「裁縫工場の側には男女の子供たちのための保育所があり、200人ほどの子供たちが出入りしている」と記されている。(註)

(3) 出津保育所の子供の年齢、クラスについて

200人ほどの子供たちは2歳から10歳位で少年、少女、幼年の三組に分かれ、組ごとに聖ヨゼフ会のシスターたちが世話をして指導に当たっていた。岩崎京子著「ド・ロ神父と出津の娘たち」(欧文社1985)の本に次のように書かれている。「少年組は『コツン組』。もの覚えの悪いことをこの辺の人たちは『こつんなか』というが、神父の耳には『こつん』が印象に残ったのだろう。少女組は『ベタ組』。ベタは仕事ののろいことで、たぶん少女組の保母は、二言目には『ベタ…』といったに違いない。幼年組は『チンポロ組』。これは小さいという意味である」。シスター橋口の思い出によると「始めの頃は親たちはあまりかまわず頭にはシラミがわき、着物も着替えなし、汚れとシラミで身体をかき、そんな有様でしたので先ず髪を洗う、着替えのない子には自分たちの着物を作り直して着せる、それからだんだんお祈りや歌を教える事をしました。神父様は自分で歌をつくって唄わせていたそうです。やさしく教えておられました。コツン組、ベタ組には仕事を教えたり勉強を

させたりしていたと聞いています」。神父は保母たちが子ども達に接するのにより母の心をもって辛抱よく見守る事を一番大切にしていたという。

(4) 教育内容、時間割など

詳細な事は判らないが先述の岩崎氏の本に次のように記されている。「時間割は大体きまっていた。朝、親とか兄弟がつれて来るのを受けとる。整列、唱歌、お話、よみかき、そろばん、戸外の自由遊び、そして、夕刻帰宅させた。『おはなし』の時間はド・ロ神父がした。イエズスさまのこと、天使と悪魔のはなしなどである。神父もだんだん上手になり、たまには『こぶとり』、『さるとかにのはなし』、『おののとうふう』などを一生懸命おぼえて話した事もあった。子どもたちの喜ぶ話は神父の小さい頃の事である…戸外の自由遊びも、神父はひっぱりだこ。それは神父が子どもを楽しませる工夫が上手だったからだった。ある朝、子どもたちが子部屋に来てみると庭の大クスノキのはりだした枝に、いすの足のないようなものが網でさがっていた。ちゃんと背もたれもついていた。『これ、ブランコ、いいます』。フランスの学校や幼稚園の庭には必ずあって、体育にとってもいいからとつけたものだ。子どもたちは順番にすわって大よろこびであった」

出津保育所はド・ロ神父の没後、中断されていたが1935(昭和10)年、再開され隣地に新しい園舎を建て「出津愛児園」の名で現在に至っている。

V 「出津保育所」は日本で最初の保育所ではなかろうか

日本で最初の保育所はこれまで「子守学校」といわれ1890(明治23)年、赤沢鍾美の開いた「新瀉静修学校」が最古と考えられてきた。しかし、カトリックの福祉事業の歴史は古く「出津保育所」は年代的にみて最初と考えられる。

ド・ロ神父が開設した「出津保育所」は彼の故郷フランスで、1769年にオーベルラン(牧師)によってアルザス州の寒村で開設された「編み物学校」の幼児学校と類似している。両者は年代こそ違え共に村おこしをめざし諸事業を行い、幼児期からの人間教育を重視し保育所を開設したものであった。

1996年発行の「パリ外国宣教会年次報告I」(聖母の騎士社)に、この「保育所」を「保護施設」と訳しているが邦訳者、松村管和司祭によると原文の「des salles asiles」は「保育所」と訳して間違いないとの事であった。フランス政府は1837年12月22日に通達をだし「保育所」(salles d'asile)の性格を「男女の子どもが、その年齢が必要とする母親のような監督と初歩的教育の世話をそこで受けるために収容される慈善的施設である」保育内容は第一位に「宗教教育の初歩的原理」をすえ、読み・書き・暗算の初歩、教訓的・道徳的唱歌、針仕事、その他手を使う仕事と定めている。「出津保育所」は内容的にみて当時のフランスの保育所が日本で実践されたものと考えられる。

(註) 片岡弥吉著「ある明治の福祉像」NHKブックス

クーザン司教報告 1977年発行 148頁